① 2023年9月17日 青戸教会「新しい人間」 高橋 克樹牧師

聖書 創世記37章12～28節、コロサイ書3章12～17節

ルターの言葉に「神の愛はその対象を創り出す。人の愛はその対象によって成り立つ」（ハイデルベルク討論）という言葉があります。神の愛は、対象が愛するに値するから愛するのではなく、神の「愛する」という行為が先にあって、その対象を「愛するにふさわしいもの」へと造り変えていく点が人間の愛と根本的に異なる点という意味です。主イエスは罪人やこの世ではじかれた存在や罪人と定められた者との交わりを通して、神によって愛されるがゆえに尊厳ある者へと、それらの人々を創造していったのです。神は人間の罪にとらわれないで、その存在自体を尊いものとして愛することから始めるのです。これに対して、人の愛は「美しいがゆえに」「愛するに値する」から愛するのです。対象によって愛する行為が決定されるのです。

創世記の冒頭にあるアダムとエバの物語で、神は「善悪の知識の木」の実を食べてはならないと命じました。これは神が人間に与えた最初の戒めです。人間が生きる上で大切な行動規範を「戒め」として神は守るように促しました。ただ、この「戒め」は人間の倫理的な行動規範である以前に、神が人間との「関係性」を取り結んでいることを象徴したものなのです。神が人間を創造したということは、最初から人間は神との関係性の中にあるということです。しかも、造ったらそれでおしまいということではなく、神はその関係性をずっと保持し続けているのです。つまり、人が存在するということは神との関係の中に生きることだと言うのです。神が語りかけることに人間が応答するなかで、神に従う信仰を形成していく物語が旧約聖書にはあふれています。これは神との関係性の中で生き方を考えていくということです。特にモーセの十戒は神と人間の関係性に加えて、人間と隣人との関係性を規定していて、人が生きるということは「私が生きる」ことではなくて、「私が神と共に生き、隣人と共に生きる」ことなのです。

アダムとエバの物語は、人間が自由意志を際限なく拡大させると、隣人までも支配しようとし、他者の尊厳性までも奪い取ってしまう。そのために神は「戒め」を与えて、創造主である神との応答関係に入らせ、隣人との人格的な交わりに生きる者としたのです。しかもそこでは自由意志を与えられた。それは神との関係性を人間の側も自由意志で応答しながら自分を形成していく一方の主体と考えたからです。

さて、私たち人間は、物事に白黒をつけたがります。物事に白黒がつくことで自分自身に安心感がもたらされるからです。けれども、白黒をつけることで、どうしても了解できなかった目の前の事柄が理解できたかのように錯覚してしまうことも起こりまし。けれども、人間を成熟度の観点からみるならば、本当は矛盾を自分の内部に抱え込むことの方が大切なのです。これを負の受容力と名付けることができます。このマイナスの事柄を受容する力がなければ、善悪の単純な思考パターンに陥ってしまいます。このマイナスの事柄を受容する力があって、私たち人間は自分自身が神との関係性を回復させることができるのです。新約聖書の放蕩息子の譬えでも、親子の関係回復を表面上はテーマにしながら、本質は神と人間との関係回復が主題になっています。

イエスの復活も、神が命を奪われたイエスとの関係を再び回復させた出来事と言うことができます。また、復活したイエスが弟子たちに顕現したのも、裏切った弟子たちとの関係の回復を象徴するものであり、その後に昇天して神の右に座したということも、神の意志によって十字架にかけられたイエスが神との関係を回復させたことを象徴しているのです。聖書によれば、私たち人間が神との関係を回復させていくうえでのキー・パーソンがイエス・キリストなのです。コロサイ書1章20節には次のようにあります。『その十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられました』と言っています。イエス・キリストによって私たち人間と神の関係が回復することを、ここでは和解と言っているのです。

人生には不条理な出来事が起こります。不測の出来事でも合理的に説明できる事柄は了解しやすいので、自分の人生に矛盾なく組み込むことができます。けれども、誰の責任でもないこと、予期しない災難、突然の不幸、人生途上の死、報われない努力、自分で責任ではない挫折、そして病、それらは不条理を伴う出来事です。この不条理の中に身をおくとき、人は「なぜ」と神に問います。この「なぜ」は不条理の中で人が必ず問う問いです。この問いに私たち人間は答えを持ちあわせません。このように人間は苦しみや悲しみから逃れることがなかなかできません。それ

は自己の存在の根拠は自分という個体内にあるという考え方が捨てきれないからです。神や他者との関係性に気づかず、この私という「個体の生」に生きる者は、その生命活動の基盤である肉体の死とともに、その根拠を失ってしまいます。ですから、死も苦難も悲嘆も常に理不尽なものになってしまうのです。

けれども、それら理不尽な出来事が実は「古い自分」に死ぬための絶好のチャンスになるのです（コロサイ2章20～3章11節参照）。福音によるならば、私たちの存在の根拠は「個体の生」の外にある救い主イエス・キリストとの関係にあるのです。このキリストに根拠をおくならば、私たちの肉体の死は必ずしも私の「いのち」の終わりとはならないのです。

神学者カール・バルトは『人生の歩みとは神に妨害されないかぎり、それ自体で癒されることはない』と言っています。挫折し、精神の危機に直面し、人生が中断させられたときに、実は本当の人生が始まるのです。愛する者との死別や回復しない病気、その他の出来事が原因で私たちが苦悩を抱え込んでしまったとき、神はなぜ私の人生を苦しめるのか、と思うのは当たり前の反応です。けれども、私たち信仰者はバルトと同じく、「神が介入し、妨害する人生の出来事があるのだ」と考えたいと思います。神が自分を傷つけることさえあると感じるのが、人生なのではないでしょうか。しかし、その傷を癒してくださるのもまたイエス・キリストを通して働きかけてくださる神なのです。

人間とは「人の間」と書くように、人間は他者との関係を離れて存在することはできません。自己の根拠はこの関係性の中にあるのです。けれども、近代人である私たちは、自分の存在の根拠は自分という個体内にあると信じています。

しかし、この「個体の生」に生きている限り、その生命活動の基盤である肉体の死とともに、その根拠も失われてしまうのです。すると、死はすべての終わりになってしまいます。しかし、現実には私たちは関わりの中で生まれ、関わりの中で死んでいく存在です。人間は誕生から死に至るまで、さまざまな人間関係において、その命をサポートされている事実を見ても明らかです。そして、私たち信仰者は人間の存在基盤の根底に「神」という存在があることを知っています。私という存在は神との関係性から切り離された抽象的なものではなく、また家族や友人、社会といった複合的な関係をすべて内に含んだものなのです。しかも、それは自分の意志で造り出したものではありません。誰も自分の生物学的な生命を自分の意志で生み出した人間はいませんし、自分の意志で自分の生まれ出てくる家庭や国を選択してこの世へと生まれ出てきた人間もいません。人間の思いをはるかに超えた大いなる神の力によって『与えられた』というしか表現できない関係性の中にほうり込まれてこの世に出てきた「いのち」を持っているのです。そういう「いのち」を自分の所有物のように割り切って処理できるのでしょうか？　このように考えてくると、私たちは自分のいのちを単純に自分に属するものと考えることはできません。「いのち」は創造主である神によって与えられたものですし、他者との深い結びつきの中にあるものなのです。

かつて、キエルケゴールは、人間存在は他者の塊だと表現しました。私たち人間の存在は神と他者との関係性の中で形作られるものです。福音はこの「関係のいのち」に根拠をおいて自己を見ていきます。自己というのは、もともと個人の存在自体にあるのではなく、他者との関係の中で現象した自己体験を自己像（セルフ・イメージ）として取り込みながら形成されているもので、自己の根拠は実は「関係の中」にあるのです。個別の生から関係の命へと生きる根拠を移すならば、自分にとって納得できない不条理な出来事も、肉体上の苦しみや受け入れがたい悲しみも、死に対しても、立ち向かっていく力が与えられます。

本日のコロサイ書3章12節に「あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。」とあります。さらに14節では「これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛はすべてを完成させるきずなです。」と言っていて、信仰者が神との関係性の中で愛されることによって、隣人との関係性においても愛を身に着けていく存在だと言うのです。

そして、15節後半では「この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです」とあります。「一つの体とされた」という意味は、信仰共同体である教会に招かれたということです。

個体の生を超えて「関係のいのち」を他者に「継ぐ」（シェアリングする）ことで、自分が生きてきた命の意味をバトンタッチしていくことができるのです。それがある意味で信仰共同体としての伝道をするということでもあるのです。つまり、私たち信仰者は自分の肉体を失ってもなお教会の信仰の中で「生き続ける」ことができるのです。それは信仰をバトンタッチする後続の信仰者がいるからです。「関係のいのち」を継ぐ存在と出会う場が教会であり、この教会があるからこそ個体の生は初めて安らかな死を迎えることができるのです。ある意味、教会における「関係のいのち」は信仰的な遺伝子を次世代に受け継いでいく営みということもできます。この信仰的な遺伝子を教会の礼拝と交わりを通して自分の中に取り込むことで、私たち信仰者は「新しい人間」に生まれ変わり続けていくのです。